

## 学校図書館担当者による教育課程支援認識の形成 カリキュラムマネジメントの視点から

西 巻 悦 子\*

### Recognition Evolution for Curriculum Support by School Library Persons in Charge -curriculum management in perspective-

Etsuko NISHIMAKI\*

#### Abstract

The objective of this research is to make clear the process of recognition evolution in school library persons in charge while identifying their own role for curriculum support. 2 junior high schools have been the target for this investigation because they specify school library utilization in their curriculum. In addition, both schools have framed their school library utilization as “Reading Course” which has eventually employed “learning effect” upon students. An interview investigation was conducted to the respective school library persons in charge. The SCAT technique has been applied for the data analysis because it is a qualitative data analytical method applicable to small-scale data. Accordingly, the process of advanced recognition for curriculum support has become perceptible among school library persons. The curriculum management with school library utilization being subsumed is certainly essential.

#### はじめに

学校図書館は、学校経営における学校教育の資源として学校図書館法には、「学校教育において欠くことのできない基礎的な設備」<sup>1</sup>と明記されている。しかし、2012年の全国学校図書館協議会による調査<sup>2</sup>では、「学校経営方針に学校図書館の利活用を明記する」とあるのは小学校8.6%、中学校15.5%、高等学校11.8%にとどまっており、学校経営と学校図書館の関わりについての認識は必ずしも高いとは言えない。ただ、制度上では、学校図書館法が改正され、

2003年4月からは「学校図書館法の一部を改正する法律等の施行について」<sup>3</sup>によって、12学級以上の学校に司書教諭が必置となった。学校図書館経営を掌る司書教諭や学校図書館担当者は学校図書館を学習環境としてだけではなく、教科課程を支援する機関として学校経営に参画する必要があると言える。そこで、カリキュラムマネジメントという学校経営の手法をとおして学校図書館経営での学校図書館による教科課程支援を考えたい。学校図書館経営は学校経営の下位概念であるから、学校図書館経営を通し

\*駒沢女子大学 非常勤講師

て学校経営の中心であるカリキュラムの経営に貢献してゆくためにはどうしたらよいか、学校図書館による教科支援の形成プロセスをカリキュラムマネジメントの視点で検討する。

本稿では、教育課程は、天野正輝の指摘<sup>4</sup>をふまえ、特別活動などの教科外活動を含む教育活動の総体を指すものとし、カリキュラムと同義として用いる。また、教科課程は教科外活動を含まない学習指導要領に定められている各教科目標に基づく学習内容とする。

## 1. 研究方法

### 1.1 研究の目的と研究方法

研究の目的は、司書教諭がその職務を通して、学校の教育課程の実践をどのように支援してきたのかを明らかにすることである。そのために、調査校は、学校のカリキュラムにおいて学校図書館活用を明示している中学校と教科課程編成において読書科として学校図書館活用を行って学習効果をあげている中学校の2校を選定し、インタビュー調査を行った。

### 1.2 インタビュー調査文析の手順

学校の教育課程表に学校図書館活用カリキュラムを明示し、学校経営で効果を上げている中学校2校のインタビュー調査であることから、小規模データに適用可能な質的データ分析手法のSCAT<sup>5</sup>が適していると判断した。

分析の手順は調査校を選定し、インタビュー調査を行い、その結果は、SCATの手順により、各カテゴリーの概念を考え、カテゴリー間の関係について論じた。

## 2. 先行研究

学校の教育活動をカリキュラムの視点から経営の視点で論じたF. イングリッシュは、カリキュラムマネジメントとは「学校におけるあら

ゆる資源を活用するために個々の教師が共有することによって生徒の学習を支援するための手法である」<sup>6</sup>と述べている。一方、学校図書館の立場から、B・ウールズは、「教師および学校図書館担当者（メディアスペシャリスト）が協働するとき、多くの学習効果が生まれる」と指摘し<sup>7</sup>、教師と学校図書館との協働を論じている。

学校のあらゆる資源のなかには学校図書館も含まれ、学校図書館担当者はカリキュラムに関わるマネジメントに参画する必要性が指摘されている。

日本では、カリキュラムマネジメントについて中留武昭・田村知子は、「カリキュラムマネジメントとは、各教科の単元の教科内容のマネジメント（運営）のみではなく、それを含めて、学校全体のトータルなカリキュラムを教育目標の達成に向けて動かしていく（機能させていく）こと」<sup>8</sup>と述べ「各学校が教育目標の達成のために、児童・生徒の発達に即した教育内容を諸条件との関わりにおいてとらえ直し、これを組織化し、動態化することによって一定の教育効果を生み出す経営活動である」<sup>9</sup>と定義している。学校教育では、奥田真丈が、学校の経営において「最も中核的な問題は教育課程の経営」<sup>10</sup>としているように、こうした経営の概念は教育の内容、すなわちカリキュラムや教育課程と結びついている。

学校のあらゆる資源のなかには学校図書館も含まれている。教師の中に学校図書館担当者も含まれているのである。ところが、2012年の全国学校図書館協議会による学校図書館担当者への調査<sup>11</sup>で、新学習指導要領への必要な対応において「学校経営方針に学校図書館の利活用を明記する」としているのは小学校8.6%、中学校15.5%、高等学校11.8%にとどまっており、学校教育における学校図書館の利活用認識は必

ずしも高いとは言えない。学校図書館は学習環境ではあるが、学校経営において多くの学校では学校図書館が教科課程を支援する機関として認識され、学校図書館を活用した教科実践が定着しているとは言い難い。一方、学校図書館では、2003年4月に「学校図書館法の一部を改正する法律等の施行について」により12学級以上の学校に司書教諭を置くことが義務づけられた。また、2015年4月1日からは「学校図書館法の一部を改正する法律」によって学校司書が配置されている。それに関連して2014年3月の「学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議（報告）」<sup>12</sup>では、学校図書館担当者は「教育指導への支援」に関する職務を担っていくことが求められると明記された。そこで、学校図書館法の「教育課程の展開に寄与する」学校図書館であるためには、学校は学校図書館による教科課程支援を明確に説明する必要と責任がある。そこで、学校教育の充実という教育目標のもと、教科や科目を設定して教育効果を高めている学校における学校図書館による教科課程支援の事例から実践に結び付けるための具体的な手掛かりが得られると考える。

### 3. インタビュー調査

#### 3.1 調査校の選定とインタビュー調査

本研究では、教育目標に学校図書館活用を明示し、教育効果をあげている中学校を訪問し、学校図書館担当者にインタビューを行った。調査校の選定は、研究の枠組みと分析の視点から、カリキュラムにおける科目の名称や教科新設に対応した組織構造において学校図書館とその担当者はどのような位置づけになるのかを調査するため、総合的な学習の名称を「卒業研究」としている中学校と文部省教育課程特例指定を受けて教科「読書科」を設けている中学校とした。

総合的な学習は、2008（平成20）年の学習指導要領の改訂においては、思考力・判断力・表現力の育成を目標として明示されている。対象校の中学校では、生徒の興味関心に基づいてテーマを決め3年間をかけて課題解決に取り組むことになっている。その結果は発表後作品集としてまとめられる。

文部科学省教育課程特例指定中学校「読書科」は、「本で学ぶ子供を育てる」ことを目的とし、教育課程に科目設定されているものである。読書に親しむ時間「朝読書等」と、読書から学ぶ時間「読書活動」の2つにわけられる。「読書活動」では調査・発表スキル学習、学校図書館利用、読書表現活動が行われている<sup>13</sup>。本研究では文部科学省の教育課程特例校の指定を受けている東京都江戸川区の中学校を調査対象とする。

インタビューは2015年1月から3月にかけて各1時間程度、学校を訪問し各校の学校図書館内で行った。インタビュー内容はICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。調査協力者は図書館長兼探究科主任教諭と数学教科担当の充て司書教諭<sup>14</sup>である。

#### 3.2 インタビュー項目の設定と回答

半構造化インタビューの項目は次のように設定した。菅谷正美は、中学校長の立場から、総合的な学習を発展させた学校づくりの試みを「教科に縛られないことから総合的である」<sup>15</sup>と述べ言語系を設けた経緯を報告している。そこで、学校長による学校経営において学校図書館がどのような位置づけにあるのか、当該職務に就いた経緯について組織的視点から尋ねた。佐藤敬子は、「全体のカリキュラムを考える場合、必ず各教科の兼ね合いを見なければならない」<sup>16</sup>と述べている。そこで、学校図書館活用における学校長や他教科との相互作用との関連

表1 半構造化インタビューへの回答			
		A卒業研究の担当者	B読書科の担当者
①組織的視点	(1)分掌名	図書館部	生活指導部：環境整備と特別支援
	(2)職務分担	図書館長	司書教諭：学校図書館管理運営
②連携・協働の視点	(1)学校長	報告・連絡等	教務部から企画経営会議に提案
	(2)他組織・教科	図書館の打ち合わせの後、教科の主任会議に出席	学年・教科と連絡のうえ職員会議に提案・合意形成
③学習者支援の視点	学校図書館活用指導	総合学習、情報科等他教科とのT・T	朝読書、言語活動を軸にした授業の実践

を尋ねた。児島邦宏は、「学びの構造図で調査体験、交流体験」<sup>17</sup>を述べている。そこで、学習者支援の視点から、生徒への学校図書館活用指導の具体的内容を尋ねた。(表1)

卒業研究の担当者Aの職位は主任で20余年の教職歴がある男性で図書館部の部長であり、図書館長である。学校経営との関わりは報告・連絡等にある。他組織・教科との関わりでは、図書館の打ち合わせの後、教科の主任会議に出席している。学習者支援では、学校図書館活用指導に力点があり、総合学習、情報科等他教科とのT・Tを行っている。読書科の担当者Bの職位は教諭で3年の教職歴の女性である。司書教諭として生活指導部に所属し、学校図書館管理運営にあたっている。学校経営との関わりでは、教務部から企画経営会議に提案し、学校図書館を運営している。他組織・教科との関わりでは、学年や教科と連絡のうえ職員会議に提案し合意形成を図っている。学習者支援では、朝読書や言語活動を軸にした授業の実践での学校図書館活用指導を担っている。

①の組織的視点では、Aは担当職位就任の経緯を「2012年に館長というものができて突然辞令が発表されて“あなたは館長ね”ということで、“はいわかりました”といっけなりました。」と述べた。教育課程表の扱いと設置の経緯は「2002年から総合的な学習の時間という枠

組みの中で探究型学習をしているためその担当者になった」と述べた。Bは「着任時に司書教諭の資格を持っていたため任命された」とのことであり、教育課程表の扱いと設置の経緯では、「平成24年度と25年度では東京都の言語能力の向上拠点校になったため」読書科ができたと述べた。

②の連携・協働の視点では、Aは、学校長に報告・連絡等の働きかけを積極的に行っており、学校長先生や他教科との相互作用では、「図書館教育では、週一度図書館の打ち合わせがあるのでその時々々の図書館運営の調整と授業進度などをからめて会議を持っています」と組織的に働きかけをおこなっていることを述べた。学校図書館活用での支援では、「様々な資料を手渡すということは学校図書館の支援の柱であって教科も支援し貢献している」と述べた。Bは連携・協働の視点において、学校長先生や他教科との相互作用では、教務部から企画経営会議に提案すると述べ、「図書館と連携した朝読書での言語活動というのを軸にした授業の実践報告の話し合いなどがあります」と述べた。学校図書館活用での支援では、「学校の研究主題があって研究推進委員会で子どもの基礎学力の定着を目指すためにポプラディアを使用しています」と述べた。

③の学習者支援の視点では、生徒の学校図書

館活用の指導内容で A は「生徒の様々なテーマに応じて様々な資料を手渡す、生徒全員の賜物と知識の世界を会わせませう」と述べた。生徒と司書教諭の相互作用では、「能力のためにまなぶのではなく、学びの道のりの中でこそ色々な能力が身についていくと感じます。」とのべた。B は学校経営として朝読書、言語活動を軸にした授業実践で、「図書館を使って行う調べ学習を指導しています。」と述べた。生徒と司書教諭の相互作用では、「読書部を作ったことで図書館の利用率が上がったことが喜びです」と述べた。

### 3.3 まとめ

A は、学校図書館の館長であり、教科の打ち合わせ会議に出るなど学校長・他組織・教科と組織的に連携・協働の体制がある。そのため、総合学習としての卒業研究や情報科との T・T が円滑に進められている。

B は、生活指導部の一員としての司書教諭であり、学校図書館関係に関する意見は教務部を通して出している。しかし、生徒部や教務部と学校図書館が連携・協働するための環境は整備されている。そのため、職員会議での合意形成が容易で、学校をあげての取り組みである朝読書や言語活動を軸にした各教科の授業実践が促進されている。

## 4. 分析

インタビュー逐語録（表 2）からキャリア形成と学校図書館への意識、学校図書館担当者の教育課程認識概念の検討を行った。

### 4.1 キャリア形成と学校図書館への意識

卒業研究の担当者 A に担当職位就任の経緯をインタビューした。A は「2012年に館長というものができて突然辞令が発表され“はいわかりました”とってなりました」と述べ、館

長である位置を肯定的に受け止めている。それは、その後の学校図書館と他分掌・教科との連携・協力に役立てられている。「2002年から総合的な学習の時間という枠組みの中で探究型学習をしている」と学校の教育課程の運営に係っているからだ。さらに A は、「様々な資料を手渡すということは学校図書館の支援の柱で教科も支援し貢献はしている」・「館長・主任として具体的な授業の学習内容の編成もしている。」こと、「担任に報告している」こと・「芸術や国語との連携がある」ことを語り、また、「生徒の様々なテーマに応じて様々な資料を手渡す、生徒全員の賜物と知識の世界を会わせる」ことだと述べている。そのうえで、館長のもとで生徒と司書教諭の相互作用を促し、「能力のためにまなぶのではなく、学びの道のりの中でこそ色々な能力が身についていく」と組織的な視点を持ち、学習者支援の視点を持っている。

読書科の担当者 B に担当職位就任の経緯をインタビューした。B は「着任時に司書教諭の資格を持っていたため任命された。」と述べ、学校経営上の配属であったため職務として当然と受け止めたとその心境を語った。その後、勤務校が言語能力の向上拠点校になったため「図書館を使って行う調べ学習」に取り組んだと述べた。自身が学校図書館担当であることから生徒の読書部を作り、そのことで「図書館の利用率が上がった」と自認している。学校図書館活用に学校経営上の必要と職務意識から組織的に取り組んだことが、結果的に学校図書館担当者として学習者支援の視点を持つに至っている。

## 4.2 学校図書館担当者の教育課程認識概念の検討

### 4.2.1 知識世界への伝導

A は「総合的な学習の『自ら課題を見つけ

自ら学ぶ』こと」に特化して「(卒業研究の)プロセス自体が大切」だと述べ、「自由にテーマを考えて学ぶ中で培われる」と、図書館の活用学習は生徒を知の世界に導く支援であると指摘している。

Bは、読書活動を基本にして、「図書館を使ってどのように調べ学習を行うかについて指導」と述べており、生徒自らが知識を得るための環境づくりに工夫し、授業や教科学習以外への支援も学習環境整備から始めていると述べた。

両者とも生徒の学習支援を中心に据えた活動である。それぞれが学習者個々人の探究活動を

いかに支援するかという点から出発していると言えよう。

#### 4.2.2 媒介的役割の認識

Aは「学校図書館の支援の柱」として「生徒の様々なテーマに応じて様々な資料を手渡す」と述べており、Bは「読書科の中で朝読書」を核として、特別時間割によって「どのように調べ学習を行うかということ」を行っていると言っている。

両者とも、学校図書館を媒介として学習が成立することを認識し活動している。

表2 逐語録による概念とインタビュー어의語り

	A:卒業研究	B:読書科
1)知識世界への伝道	総合的な学習の筆頭に挙げられている「自ら課題を見つけ自ら学ぶ」ことをそのままやっています。そのプロセス自体が大切だと思います。そうすれば社会の変化くらいには対応するでしょう。自分であれこれ悩んで考えてゆく中で本のすごさとか、「自分の知りたい世界がここに書かれてたのか」と気づく経験だと思います。こうしたことは自由にテーマを考えて学ぶ中で培われると思います。民主主義の国なのだから、になりたい自分は自分で手さぐりする原則はちゃんとおさえないといけないと考えています。	ポプラディアは各階2セットずつあり、学校図書館にも今の段階では4セット置いています。これを基にして、図書館を使ってどのように調べ学習を行うかについて指導しています。学校の各階に行事で使用する本が置いてあります。具体的には1年生は東京都の事が調べられるように“るるぶ”などが置いてあります。2年生に関しては新潟県林間学校に行くのでガイドマップや職場体験用の本を置いています。3年生は修学旅行に関連した本を置いています。
2)媒介的役割の認識	卒業研究にしても探究にしても生徒の興味は違うので生徒の様々なテーマに応じて様々な資料を手渡すということは学校図書館の支援の柱です。図書館教育では、週一度図書館の打ち合わせがあるのでその時々図書館運営の調整と授業進度などをからめて会議を持っています。	指導の中で大事な視点はやはり言語活動です。図書館と連携して、いくつかの活動を行っています。一つ目は図書館と連携して読書科の中で朝読書をしています。2つ目はポプラディアを使って、どのように調べ学習を行うかということ特別時間割の中でやっています。
3)学校経営貢献への自己認識	図書館には予算が必要ですから校内でもプレゼンをするのです。それで本が増えてくれば教科も支援できますし貢献はしてると思います。	先生方以外に栄養士さんとか主事さんとかが声をかけてくださるんです。使い方も広がったかなって。教員がこんな図書館にしたいなっていうのに少しずつ近づいてるって気がします。

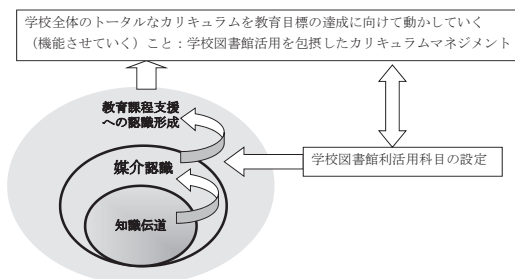
### 4.2.3 学校経営貢献への自己認識

A は教科への貢献として、図書館活用についてプレゼンすることによって予算（学校図書館の経費）が増え、結果として教科資へ提供できる資料が増え好循環となることを意識しており、それを学校図書館から学校経営へ「貢献」することだと述べている。B は「教員がこんな図書館にしたいなっていうのに近づいている」と述べ、学校の構成職員である栄養士や主事からの支持に触れている。これは、学校経営に貢献するための学校図書館経営を推進している成果であることの自覚と認識を得ていることである。

## 5 結論

### 5.1 学校図書館担当者が教育課程支援への認識を形成するプロセス

両者とも、学習者の探究活動をいかに支援するかという知識世界への伝導者の役割への自覚から始まり、学校図書館を媒介として学習が成立することを認識した活動を行っている。役割の認識による学校経営上の他組織との相互作用があり、そのことが、学校図書館による教科支援によって学校全体のカリキュラムに貢献する活動になっていると言えよう。インタビュー調査では、学校図書館が教科課程支援を行うための学校図書館の要件を明確にした。1. 知識世界への伝導があること、2. 媒介者の役割の認識があること、3. 教科課程支援への認識があること、以上の3点である。インタビュー調査で見られた3. 教科課程支援への認識は、カリキュラムマネジメントの文献調査での意識的な働きかけと同じである。そこで、概念間の関係を学校図書館担当者が教育課程支援への認識を形成するプロセスを以下のように図式化した。



学校図書館担当者の知識伝導により、学習者が学習を深めていくの。そのことにより学校図書館担当者は学校図書館が学校と教育課程に係わるという学校経営と学校図書館との間を媒介するという認識をもつに至る。さらには教育課程支援を行う学校図書館という認識が学校教育に携わる全員の共通認識となる。その結果、学校図書館活用と学校経営との相互作用により、学校長の学校経営に学校図書館活用が学校の教育目標に明示される。それは学校図書館による教育課程支援として学校図書館経営の一翼を形づくることを周知させるものとなっている。その結果、学校全体のトータルなカリキュラムを教育目標の達成に向けて動かしていく（機能させていく）ことになる。換言すれば、学校図書館活用を包摂したカリキュラムマネジメントを形成している。

### 5.2 学校図書館活用を包摂したカリキュラムマネジメントの必要

以上のように知識世界への伝導として学校図書館活用が行われ、学校図書館担当者の媒介的役割の認識により、教育課程支援への認識形成が形成されてきた。そこで、学校図書館担当者による教育課程支援認識を形成するには学校全体のトータルなカリキュラムを教育目標の達成に向けて動かしていくカリキュラムマネジメント点が必要だといえる。

## おわりに

日本では、学校図書館活用にカリキュラムマネジメントの理論は含まれていない。

2003年に司書教諭が12以上のクラスを持つすべての学校に配置されることになった。しかし、これら司書教諭は専任ではない。彼らは各教科の担当者およびクラス担任である。したがって、学校司書が配置され、2014年に、学校図書館法の一部にすべての学校は、学校の図書館員を有していなければならないと修正された。しかし、小学校、中学校、高等学校における司書教諭の発令状況は全体の平均で70.1%である。また、学校司書の配置状況は小学校、中学校、高等学校の平均で57.3%である。

そこで、学校図書館による教育課程支援を推進するためには、教育課程支援を担当する人の養成や研修が必要であるといわれているが、学校図書館担当者の養成や研修の在り方を検討するためには、現在の学校図書館担当者の職務を評価することが不可欠だ。

そこで学校図書館による教育課程支援の理論的背景としてカリキュラムマネジメント理論が有効である。また、学校図書館による教育課程支援を推進するためには、教育課程支援を担当する人の養成や研修が必要である。担当者の養成や研修の在り方を検討するためには、現在の学校図書館担当者にカリキュラムへの意識を高めるような研修内容にすることが不可欠だ。そこで、学校図書館担当者の研修にカリキュラムマネジメント理論を含めて検討することを提言したい。

## 注・引用文献

- 1) 「学校図書館法」“(この法律の目的) 第一条 この法律は、学校図書館が、学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であることにかんがみ、その健全な発達を

図り、もつて学校教育を充実することを目的とする”。<http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/strsearch.cgi> (参照日：2015-09-25)。

- 2) 全国学校図書館協議会調査部「子どもたちの読書と学校図書館の現状」全国学校図書館協議会、2012、p.62. (参照2015-03-19)。
- 3) 「学校図書館法の一部を改正する法律等の施行について (通知)」平成9年6月11日 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/dokusyo/hourei/cont\\_001/012.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/cont_001/012.htm)
- 4) 天野正輝「教育課程」は、教育内容についての国家基準によるプラン、しかも立案(構成)レベルのものを表す用語であり、その展開過程は含まれていない。「カリキュラム」には目標、内容・教材のほか、教授・学習活動、評価の活動なども含んだ広い概念として把握している」、『教育課程重要用語300の基礎知識』、明治図書出版、1995、p.21。
- 5) SCAT: Steps for Coding and Theorization とは質的研究の方法のひとつである。大谷尚「SCAT: Steps for Coding and Theorization— 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」感性工学 Vol.10 No.3. <http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/15075/3/%E5%A4%A7%E8%B0%B7SCAT%E8%AB%96%E6%96%87%E6%84%9F%E6%80%A7%E5%B7%A5%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E8%AA%8C2011V10N3.pdf>
- 6) Fenwick W. English “Improving of curriculum management in the school” 1985. <http://files.eric.ed.gov/fulltext/ED201049.pdf#search='Fenwick+W.+English+Improving+Curriculum+Management+in+the+Schools+Council+for+Basic+E>

ducation (参照 2016.10.15)

- 7) Blanche Woolls “The School Library Media Manager” Libraries Unltd Incorporated, 2004, p.22.
- 8) 中留武昭・田村知子『カリキュラムマネジメントが学校を変える』学事出版、2004、p.10.
- 9) 前掲12) の p.11.
- 10) 奥田真丈『教育課程の経営』第一法規、1982、240p.p.1.
- 11) 全国学校図書館協議会調査部「子どもたちの読書と学校図書館の現状」全国学校図書館協議会、2012、p.62.
- 12) 「学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議」平成25年8月1日、初等中等教育局長決定、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/099/houkoku/1338524.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/099/houkoku/1338524.htm) (2016.10.15参照.)
- 13) 「特集、学校図書館で読書の質を上げる 江戸川区『読書科』設置への道」、[http://www.kknews.co.jp/kenko/2014/0421\\_2a.html](http://www.kknews.co.jp/kenko/2014/0421_2a.html), (参照2016.10.15).